

思い出

昭和54～昭和56年度下水道課長

増山 拓之

小矢部川流域下水道の関係全市町村の供用開始、心からお慶び申し上げます。

下水道課20年の歩み発刊に何か思い出を寄稿せよとのことで筆は執ってみたものの、さて何を書いてよいものやら。思い出が少ないのも困るが、ありすぎるのも困りものである。それと生来のずぼらで忘れっぽい性格が災いして、たった15年前のことなのにつくづく記憶の不確かさを痛感している次第。

昭和54年4月1日下水道課長拝命。時あたかも猛烈な反対運動もようやく沈静化と言うか膠着状態となり、県、地元双方が何とか事態打開の方策を摸索し始めた時であった着任間もなく、地元に対策協議会ができ、こわいもの知らずの無鉄砲さと強力な技術スタッフを後ろ盾に下水道のげの字も知らないど素人の課長が処理場用地取得交渉にのぞんだ。連日連夜の地元説明会、約2年に亙る地元交渉の幕開けであった高岡農協二上支所の2階和室が主たる説明会場で、我々下水道課の職員が会合時間の1時間前位に会場に行き、机の配列からお茶、灰皿の用意までして地元の役員さんのお出ましをお待ち申し上げるという仕儀であった。

少し遡るが、私と小矢部川流域下水道の出合いは都市計画課長代理の時、昭和50年の計画決定の時に始まる。小矢部川流域下水道の計画決定が付議される都市計画審議会が明日に迫った当初審議会の会場を富山電気ビルに決めていたが、審議会開催の前日になって下水道課から明日の審議会に地元の反対派が多数押しかけるとの情報が伝わり、電気ビルでは不特定多数の者が自由に入出入りするため委員さん方の安全を確保し難いので開催を延期したいとのこと、審議会事務局をあずかる都市計画課としては、ともかく審議会会長のご意向を伺った上でということになり下水道課長、都市計画課長と私が帯同して成田政次会長（元県副知事）の私宅へお伺いに参上した。成田会長から事務局の意見はどうかとのご下問がありそれぞれの立場で率直な意見を申し上げた。

すなわち、下水道課の意見は、情勢きわめて我に利あらず審議会が混乱する恐れ無きにしもあらず、よって延期するのが至当との意見。今まで艱難辛苦地元反対住民と対話の場作りに精根を傾けてきた地元折衝の第一責任者である下水道課長さんの立場からすればここで元も子も無くすることはできない。しごくまともな意見とされた。

かたや都市計画課の意見は、審議会に付議するについては下水道課として十分な地元説明も行って来ていることだし、反対派が押しかけると言うことだけで審議会を延期すると言うのはあまりにも意気地のない話で審議会軽視と言われかねない。場所が電気ビルで保安上心配があると言うのなら警備上より安全な県庁内に会場を移して審議会を開催すべきとの意見。その急先鋒が私であった。今から思えば若気の至り。

成田会長は熟慮の結果、審議会開催を決断。結果的に都市計画課の意見が通った形となった。当日、審議会は会場を県庁特別室に移して開催された。予想通り地元反対派の連中が150名位だったか県庁に押しかけ審議会傍聴を迫ったが、審議会は非公開であり、審議結果をお知らせするというので反対派の人達を3階大ホールで待期させた。

反対派の代表格の間から、非公開なら我々に意見陳述の機会を与えるよう申し入れてきた。申し入れが受け入れられないのなら特別室前に座り込みをすると、強硬で今にも動き出しそうな気配。意見陳述を許すかどうかについて審議会は審議を一時中断し、協議の結果、代表者に入室を許し意見を述べさせることに決着。たしか5名の者が意見を述べたと思うが、勿論全員が小矢部川流域下水道計画について反対し、計画決定を承認しないよう求める旨の意見であった。

結局、審議会は地元関係住民の十分な理解を得ることの条件を付して計画決定を承認。その間、審議経過を説明に大ホールへ出向いた土木部長を小突いたあげく廊下を追いかけ回す一幕、反対派のけんまくに恐れをなした庁舎管理係長が土木はけしからんと総務部長にご注達に及んだが、反対に審議に支障の無いよう、また審議会長ほか委員全員の安全の確保に全力を傾注すべしと叱咤激励を受ける一幕等いろいろあったが、とにもかくにも条件付とは言え計画決定が承認され、小矢部川流域下水道の実施に向けての大（第ではない）一歩が踏み出された。

4年後に当の下水道課長を拝命しようとは神ならぬ身の知るべくもない出来事であった。下水道課に在勤した3年間、上司、先輩、同僚の多くの方々に随分お世話になったし、勉強もさせていただいた。あの時の一緒に仕事をした方達の中で、既に鬼籍に入られた方も多し。巢山副知事、堀市長、中崎開発部長、長井主幹、滝沢課長代理・・・彼岸で今日の供用開始をどのように受け止めておいでだろうか・・・現世とおなじに祝賀会を・・・

お申し付けの1, 200字を大幅に超えてしまった。相手を傷つけず己のちっぽけなプライドを守りながら思い出を書くというのも難しいものだ。思い出はやはり自分自身と共通の思い出を持ち得た限られた人達の中でしか生きられないようである。